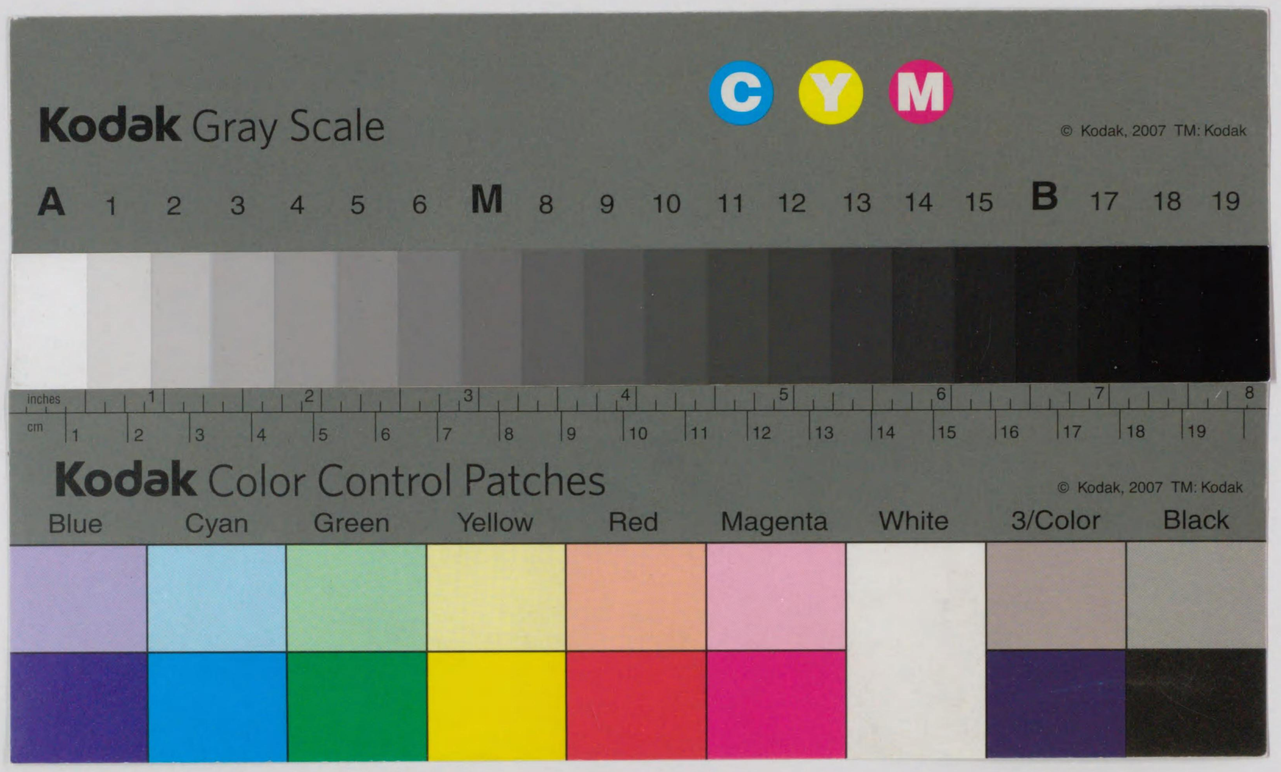


576-80
1200501520051
576
80
O 複写

防長漢式鏡の研究

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak

防長漢式鏡の研究

山口高等學校
山口縣立博物館 嘱託
弘津史文編

目次

（一）序文
（二）はしがき
（三）圖版說明目次
（四）圖版說明
（五）圖版

昭和三九・四・一

576-80

序

輓近考古學の進歩まことに著しく殊に地方史蹟の研究に於てその然るを見る。これ本邦古代史考覈の上最喜ぶべき現象なり。抑も地方考古學的研究の進歩は獨り其鄉土の古代文化を闡明するの益あるのみならず亦他日日本考古學の大成に資する所鮮からざればなり。弘津氏は熊毛郡平生町の土豪にしてまた稀覯の篤學者なり。世の富豪が旦暮豪華を競ふに反して潜心沒頭數十年斯學の研究に於て蔚然一家を成す。從來防長遺蹟の考古學的研究に關する著書論策尠からず。斯學の研究史上故近藤清石翁に次ぐの學者なり。近者「防長漢式鏡の研究」を著して之を世に公にす。余は君の平生を知るを以て斯一書が防長古代の研究に幾多の好資料を提供し學界を稗益する所亦尠からざるべきを信

じ一言を陳べて以て序に代ふ。

昭和三年七月十五日

山口高等學校長　新保寅次

享和年間	四面
安政年間	一面
明治年間	十六面
大正年間	一面
昭和年間	一面
合計	二十五面

寛延年間の百七拾數年以前より今日に至る迄に我が防長より發見せられし上古の古鏡は本圖版二十五面のほか左記のものあれどもその多くは所在不明にして發掘當時の記錄によるものなり。

發見年數	數量
天明年間	二面
文化年間	一面
明治年間	十面
大正年間	一面
合計	十四面

その發見地を詳記すれば左の如し。

周防國熊毛郡伊陸山林　一面（明治二十五年東京帝室博物館）

同　玖珂郡師木村大字桂野字船ケ迫　一面（文化年間所在不明）

郡志に「文化四年四月十七日治兵衛と云ふ者茶園の溝を掘るとて五尺許りの底より圓鏡一枚鍬二枚鎌、毛抜、鐵鍋三口、同釣二、湯立釜の蓋の如き土器一、土器二枚壺一壺は口徑曲尺一尺五寸底二尺にて綱の紋ある物を獲たりと云ふ」また同郡坂上村茶トウケ原にては寛政八年二月十五日鎧、冑、太刀、陣鍋、土器、古錢出づ」と按ずるに古墳墓なるべし。

周防國玖珂郡柳井町字水口茶臼山第三百五番山林　一面（明治二十五年所在不明）

本圖版第二、第三、第四、第五に伴出せしものなるもその所在を明らかにせず。

周防國佐波郡防府町三田尻桑山　二面（天明年間）

桑山塔之尾と云へる地に天明五年毛利重就小亭を建つるが爲め開拓し鏡二面（一面は再び埋められ一面は神體とせらる）刀矛等の古器を掘出せしにより新に石櫃を造り山頂に埋め小祠を其上に建て若宮と崇めたり。石櫃に銘文を刻す其銘曰く

桑山石櫃銘乃土中所護器

老侯巳居華浦、今歲命營小亭于桑山、役夫掘地、有器出、乃益掘之、四方皆疊石爲壁、々中長一丈二三尺、横半之、深稱之、蓋昔人之地窖也、其中所得敗器數十事、金鐵之可辨識者、鏡二、刀三、鎗尖五、鈴一、環二、鏃若干、委曲三尺許、大如柄者一、靴形有釘及銀魚之飾二、零細似可以爲飾者若干、又有似甲裳之殘者、其他皆鏽廢不可知、陶器則花瓶盞者二、外有硝子貫珠大小百許、硝子如管者十許、巳無土人口碑之傳、又土中無文字可讀、是不可知何人所爲、而其器在土中、數百年無疑也。有司議以爲、此器昔人深藏之土中、其所寶重、而精神之鍾可知也。乃今棄之不顧、亦非無精之甚耶、乃新創小祠于山頂、磨一鏡、以爲神躰又造石

匣悉韞其所得。埋之祠下又其器以四月廿二日始出。乃永以其月日。爲設薄祭之斯云

瀧鴻謹撰

前記の如く石槨を有する古墳にしてその發見遺物は、鈴、管玉、臼玉、合六十顆許瑠璃。鏡（厚一分五厘小の分）大小二面（厚一分五厘雲母の如し鐵鎗類四、柄の類六、鐵器（形不明）鐵鏃一、其他銀魚、土器、高坏四、壺二、と記しあり、鏡は一面を磨きて神體と爲し新に小祠を山巓に創し石匣を造つて其他悉く其内に入れ再び祠下に埋むとあり。文中「靴形有釘及銀魚之飾者二」とあるは。明治四年十二月山口縣より神祇省への届書に添へたる圖を見るに靴は其の裏面長九寸四分一枚銅にて總滅金銀魚を鎖にてつなぎたるもの一つ殘れり三つ落ちたるあり。また厚さ紙の如く銀魚も厚さ同じこれに滅金あり鈴を附し鈴は唐金とあり。また靴の側面長九寸八分針金にて六角形の網を作りて張り裏面より取附けあり。此等より見て靴は金銅製にして大正九年十一月二十二日朝鮮慶尚南道梁山面北亭洞。梁山夫婦塚發掘のものとほゞ同形式の遺物なりしを知らる。

日本書記曰く

推古天皇十一年春二月癸酉朔丙子征新羅大將軍來目皇子薨於築紫遣土師連猪手令掌殯于周芳婆婆故猪手連之孫曰婆婆連其是之孫也

とある來目皇子の御殯葬地なるべく來目は粂山の誤りしかと考ふものなりと云ふ。粂にして後世粂は桑字形相似たるより桑山は粂山の誤りしかと考ふものなりと云ふ。

周防國吉敷郡井關村大字阿知須字砂合　一面（明治年間所在不明）

長門國厚狹郡厚狹町大字郡字西下津長光寺山　一面（明治十四年所在不明）（熊谷彌之助氏藏）

此の古鏡は明治十四年舊三月十九日發見せられしものにして本圖版第二十三、第二十四、第二十五、圖版に伴出せしものなり。内行花紋鏡にして、入弧紋によつて内區を形成す。直徑三寸七分重量二十七匁あり同地熊谷彌之助氏所藏せらる。

長門國厚狹郡王喜村字松屋　一面（明治年間所在不明）

長門國厚狹郡小野田町字東須惠小字東高尾山　一面（明治年間所在不明）

長門國宇部市西區上町字宇部新川驛前國吉信義氏邸前　一面（明治年間所在不明）

長門國豐浦郡川中村八幡宮境内　一面（明治年間所在不明）

長門國豐浦郡綾羅木小字上ノ山　一面（明治年間東京帝室博物館）

長門國大津郡菱海村大字河原龜山　一面（明治年間鈴鏡）

長門國大津郡深川村字東深川小字怡塚四三九山林　一面（明治年間同）

此の古鏡は素紋鏡にて鏡背には何等の紋樣無く直徑一寸三分の小形のものなり。大正十四年一月より八月までの間に此の附近に大津中學校の建設さるゝにつき其地均らしの採取土としてこれを崩壞せし爲め同山南邊に並列しありし十數個の横穴古墳を發見せり。また幾多遺物の發見さるゝものあり。今その發見の主要なるものを記せば此の丘陵は長軸を西南とする約四拾間の長さを有する大體前方後圓狀をなせるものにて即ち前方に當る處は西南に面し高約四間幅二十五間を有し後圓部に當る處高さ約七間底徑三十間にして其の前方部と見るべき前半は漸次削除せられて畑地となり居れり。この墳丘狀の南邊に十四個の横穴を四階段に築造されあり。崩壞前の本丘は恰かも一大古墳而かも所謂前方後圓墳の形狀を髣髴せしむるものなりしも此の丘陵の地質は凝灰

岩よりなり固より封土的のものにあらず。此の地附近一帯の地質と一致するものなりまた此の附近に存在する仙崎町字白潟小字山崎の横穴も同様なる構造を爲し。横穴の羨道入口二尺天井まで四尺奥行八尺前後の單室の最も簡素なる形式をなせるものなり羨道入口は扁平なる石材を以て閉塞されあり。發堀者の言によれば遺物は羨道にありて玄室には人骨を發見せられし由、人骨合計二十數體、土器、馬具、裝飾品、武器等あり。その主なるものは金銅製圭頭大刀柄頭、金銅製八所透鐔同六所透鐔、金銅製大刀柄、貝釧、銅鈴、銅製壺鐙、砥石等の貴重品を多く發見せられたる古墳なり。

以上合計十四面なり前記の二十五面を合してその數三十九面となり周防部に二十五面長門部に十四面を發見せられし事となる。このほか世に隠れたるものありとするも防長發見の古鏡は五十面を越へざるべし。而れども第一圖版の三鈕素紋鏡の如きは大和國及河内國にこれと略同一のものゝ發見せられし事あるのみ。第二圖版の變形神獸鏡の如きその雄大なる點に於て日本第一と稱せらるゝ珍品にして、我が防長上古の文化を談ずるに足るものゝみならず我が國上代に於ける鑄造術の造詣を窺ふべき好資料と言ふべし。

編者は多年の研究によつてこゝにこれ等を集めて防長漢式鏡の研究と名づく。

昭和三年七月一日

山口高等學校歷史教室に於て

編者　弘津史文誌

○圖版說明　目次

第一圖版　三鈕細文鏡　（長門國梶栗濱）
第二圖版　變形神獸鏡　（周防國茶臼山）
第三圖版　變形四神四獸鏡　（同）
第四圖版　四神四獸鏡　（同）
第五圖版　内行花紋鏡　（同）
第六圖版　神獸鏡　（周防國白鳥社々地）
第七圖版　四神四獸鏡　（同）
第八圖版　獸帶四神四獸鏡　（周防國宮ノ洲）
第九圖版　神獸鏡　（同）
第拾圖版　王氏作盤龍鏡　（同）
第拾壹圖版　内行花紋鏡　（同）
第拾貳圖版　劉氏作畫象鏡　（周防國竹嶋）
第拾參圖版　天王日月四福四獸鏡　（同）
第拾四圖版　神獸鏡　（同）

第拾五圖版　四乳龍虎鏡（長門國三見）
第拾六圖版　內行花紋鏡（長門國吉田）
第拾七圖版　獸首鏡（周防國男山）
第拾八圖版　五神五乳鏡（周防國女山）
第拾九圖版　四獸鏡（周防國赤妻）
第貳拾圖版　變形圖樣鏡（同）
第貳拾壹圖版　位至三公鏡（同）
第貳拾貳圖版　內行花紋鏡（同）
第貳拾參圖版　三神三獸鏡（長門國長光寺山）
第貳拾四圖版　三神三獸鏡（同）
第貳拾五圖版　三神三獸鏡（同）

◎圖版說明

○第一圖版

△三·鈕細紋鏡　直徑二寸九分

發見地　長門國豐浦郡安岡村大字富任字梶栗濱

發見年月　大正二年十一月六日

所有者　東京帝室博物館

此の古鏡は防長兩國に於ける最古のものにして「考古學雜誌第四卷第九號（五七一頁）」によれば長門國豐浦郡安岡村大字富任字梶栗の濱に於て地下三尺許の箇所にて自然石より成る長方形長さ六尺幅二尺一寸高一尺五寸の岩石に堀り當て其內部より銅劍二本土器底部破片一個と三個の鈕ある古鏡等を發見せりと云ふ。其長方形の岩石とは石棺か石槨か銅劍は考古學雜誌第四卷第六號黑板博士論文中に柄入せられたる筑前博多許斐氏藏銅鉾銅劍の寫眞中所謂「クリス」形に非ざる分のものに似たり。一は長七寸二分幅七分にて、

鏡は甚だしく破損せるも徑二寸九分に配置せられたる三個の鈕は最も珍なり。且つ其背紋亦漢式鏡又は唐式鏡の分と異り銅鐸の鰭等に存するものに似たり。此種の銅劍は近年九州地方より發堀せられて且つ他に附屬品も出で從つて其年代等も漸次判明し來れり今や更に新に長門國より新材料の出づるあり不明の問題は更に解決の氣運に向へるは喜ぶべき事なり。

此の古鏡と略ぼ同一なるものは大正七年五月五日大和國南葛城郡吐田郷村大字名柄に於て銅鐸（高七寸八分）と共に發見されたり。此の鏡は離れたる位置に二個の山形狀の鈕あり蒲鉾形の緣に至る間平面にしてこゝに一種の鋸齒紋を表せり。本圖版のものは三個の鈕あり共に本邦製品とせらるゝ河内國中河内郡堅下村より一面發見せらるゝありその年代は未だ容易に定むべきものにあらず。その紋樣の起源を未開人の間に行はるゝ編物より發達せるものとなし、其文樣の原始的にして南洋的色彩を帶びたるものなりとしこれを支那秦漢頃の文樣と直接の關係なしとする說あり。

○第二圖版

△變形神獸鏡　直徑一尺四寸八分

發見地　周防國玖珂郡柳井町字水口茶臼山第三百五番山林

發見年月　明治二十五年二月四日

所有者　東京帝室博物館

此の古鏡はその鏡背の紋樣內區に異樣の獸類を配する形式にして製作優美なる大鏡なりその製作年代は三國前後の鑄造と認められ而かも本邦製品と見るべきものなり。日本全國に於て發見せられたる古鏡中最大の漢式鏡にして上古周防の地に於ける文化を知るのみならず我が國上代に於ける鑄造術の造詣を窺ふべき好資料と言ふべし。此の古鏡を發見せし古墳は明らかに前方後圓墳にして前方部を西南に向はしめ前方部東北長十七間四尺後圓部高三間前方部高一間西北全長四十間にして蒼石埴輪を有する大墳なり。遺物は後圓部の中心に前方部に向きて作られたる石槨の內部より發見せしものにてその當時の記錄によれば大鏡一面小鏡四面劍鉾鏃壺等にして此の外發堀に立會はれし故近藤清石氏の蒐集品中に此の古墳より發見せられたる長三寸五分の銅鏃ありし事を編者は發見せり

此の銅鏃は現今山口縣立博物館に陳列せらる。

○第三圖版

△變形四神四獸鏡　直徑七寸六分

發見地　周防國玖珂郡柳井町字水口茶臼山第三百五番山林

發見年月　明治二十五年二月四日

所有者　東京帝室博物館

此の古鏡は文樣表現の手法比較的鮮明なるも其龍龍に至りては著しく變化せり。第二圖版のものに伴出せしものなり。緣厚二分にて面に一分の「ソリ」あり其手法生氣に乏しく本邦製品と認めらる。

○第四圖版

△四神四獸鏡　直徑約六寸

發見地　周防國玖珂郡柳井町字水口茶臼山第三百五番山林

發見年月　明治二十五年二月四日

所有者　山口縣立大典記念教育博物館

此の古鏡は第二圖版第三圖版の古鏡に伴出せしものにして破碎殘缺し完形なけれども一種の神獸鏡なり。帶銘あり「百身長樂」なる一句を存す。高橋健自先生著「鏡と劍と玉」に於て解讀せられし肥後國玉名郡江田村古墳出土の同式鏡と同じく

吾作明鏡。幽凍三商。配像萬彊。競從序道。敬奉賢良。周刻典祀。百身長樂。

乘事主陽。福祿正明。富貴安樂。子孫蕃昌。賢者高顯。土至公卿。與師命長。

とありしものと認められる。此の古鏡は發堀の際縣廳より立會の故平野雄也氏の所藏せられしものにて同氏の沒後山口縣立博物館に藏せらる。その手法より見て支那六朝式の特色を發揮せる精品なり。支那舶來鏡たるは誤を容るゝの餘地なしと云ふ。

○第五圖版

△內行花紋鏡　直徑六寸五分

發見地　周防國玖珂郡柳井町字水口茶臼山第三百五番山林

發見年月　明治二十五年二月四日

所有者　玖珂郡柳井町森田愛輔氏

此の古鏡は第二、第三、第四、圖版のものと伴出せしものにして色稍々鉛色を帶びたる銅質なり。鏡背の紋樣は紐の四葉座とそれを繞る內行八弧紋によつて內區を形成するものにて梅原末治氏はその手法より見て線の著しく硬化して明確を缺ぎたるは模倣の痕を認むとしこれを本邦製品なりとされしものなるゝのみならず近年朝鮮平壤附近の樂浪時代と認むべき墳墓より多く精品を出すあり。本邦の古墳よりも舶載のものを往々發見し殊に此の形式は本邦人の趣好に適したりと覺しく我が鏡造部にて模作せられたるもの多し。防長よりも多く此の種の鏡を發見せらるる此の鏡は發掘の際村總代として事に與かれる森田愛輔氏の得てこれを珍藏せらるる。これ等を發見せし古墳にある發掘の顚末を記せし碑文をこゝに記す。

柳井茶臼山猿古藏遺跡碑

陵谷變化滄桑互遷自古而爾而人无知其端逮逢一事觸一物然後愴然而思憬然而省暢然而懼也余於近曰茶臼山發古藏視之茶臼山在周防玖珂郡柳井村琴石山之陽頗有小祠弊隨年久無知其初者祠後邱上哃生一竅爲樵童所認既而人益怪之遂相共撲之村總代森田愛輔請吏臨焉試鑿發之劘地數尺隱々有物覆以巨石益怪焉戮力撤之果獲古大鏡一面小鏡四面鈌鉾鏃若干壺若干鏡大者徑尺有五寸小者七寸强弱貌皆奇偉膏融液結扣處哀玉廼實物也劍以下殘缺已甚也初鑿頗出土焦黝者遇雨融解流地上殷如鮮血蓋名朱云或曰古塚也回急掩之或曰此必祠之神主也或曰古者多艸賊故爲賊藏之議之議未決官采而歸之東京帝國博物館酬以金百貳拾圓寮識曰此物已閱千有五百年所也於是愛輔等建議立石遺跡而以其餘金更新祠宇以奠人心夫古之藏此物未有知其說雨雪崩頹銷剝蝕澌既久而遂生其竅此豈人所得而與乎盞物之所以隱顯存亡實有數而存焉今官采而歸之博物館而村民相謀立石以奠人心此誠兩得者也矧人心之感觸物而後世吾知世讀此碑悟塚墳之不足恃知實物之多云悲世代之易遷其必有愴然而思愾然而省惕然而懼者矣則其舉之益人道未鮮少也其初認之在明治二十五年二月四日而其發之則同月十一日警官小南十郎、下田閏助、吉田文一、原安太郎、新庄熊太郎、荒川詰亮、縣廳差遣鑑定委員平野雄也村吏小田佐一、吉田景秋等實同臨之而村總代森田愛輔顧勞其事役力若干凡此皆其可藏者銘曰

韜亦既久、茲洩厥光、顯晦反覆、人孰揣量、劍之眞珉、間于彼蒼

正堂東敬次撰

○第六圖版

△神獸鏡　直徑五寸八分　重量百拾六匁

發見地　周防國熊毛郡佐賀村大字佐賀字森ノ下白鳥神社々地

發見年月　寛延二年十一月

所有者　熊毛郡佐賀村大字佐賀字森ノ下白鳥神社

此の古鏡は色稍々黑漆色を生じ淡き綠色を帶びたる優秀なる品なり。

白鳥神社古墳

一、所在地　周防國熊毛郡佐賀村大字佐賀字森ノ下第二千二百四十九番地（社地七畝三歩）

第百二十九番地（山林四反十一歩）

一、所有者　熊毛郡佐賀村白鳥神社

和泉國大島郡大鳥神社を勸請して後圓部を開拓し白鳥神社を創建し爾來永正二年三月、永祿四年三月、天正十九年四月、慶安五年八月、寶永三年八月、寛延三年十一月の六回

社殿改築の際後圓部より古鏡二面、碧玉岩製管玉十二個、鐵器破片（直刀斧頭）巴形銅器、埴輪破片等を發掘現今同神社に所藏するものこれなり。此の古墳全山扁平なり川石を以て葺けり墳形は前方部を北に後圓部を南北全長五十五間、前方部東西三十七間、前方部高四間五尺、後圓部高六間あり隊の痕跡存す。

周防國造（編者著周防の大墳序文）

周防國造ハ國造本紀ニ輕島豐明朝茨城國造同祖加米乃意美定賜二國造一トアリ輕島豐明朝ハ應神天皇ノ御代ニテ茨城國造ノ初祖ハ天津彦根命十四世ノ孫建許呂ノ命ナルコト古事記日本記國造本紀姓氏錄常陸風土記ヲ參照シテ知ラル建許呂命ハ神功皇后ニ仕ヘテ入人ノ子アルコト常陸風土記ニ見エタレバ應神天皇ノ朝ニ始テ周防國造ニ任命セラレタル加米乃意美ハ蓋シ建許呂命ノ子ナルベシ和名抄ニ周防國熊毛郡周防鄉アリ周防國造ハ昔熊毛郡地方ニ治所ヲ構ヘタルモノト考フレバ此ノ地方ニ存在セル古墳ハ何レモ周防國造一族ノ墳墓ト見テ謬ナカルベシ而シテ同郡佐賀村大字佐賀字森下鄉社白鳥社境内ニ在ル前方後圓型ノ大墳ハ蓋シ周防國造加米乃意美命ノ墓ト認ム其ノ築造仁德天皇時代ト見ユレバナリ。而シテ玖珂郡柳井町大字柳井水口ニ存在セル茶臼山ト呼ブ前方後圓型ノ大古墳モ亦周防國造ニ關係アルベシ或ハ此ノ方加米乃意美命ノ墳墓カト思ハルレド何レニシテモ父子ノ間ニ在ルベシサレバ二墳共ニ保存シテ研究ヲ盡スベキモノナリ。

大正七年一月廿八日

宮内省御用掛　増田于信

○第七圖版

△四神四獸鏡　直徑四寸四分　重量七拾九匁

發見地　周防國熊毛郡佐賀村大字佐賀字森ノ下白鳥神社々地

發見年月　寛延二年十一月

所有者　白鳥神社

此の古鏡は半圓方形帶の內に四神四獸を現はせるものにして第六圖版のものに伴出せり

（白鳥神社所藏文書）

覺

熊毛郡上關佐賀村有之

一、白鳥大明神　神主　田村庸之介抱

祭神　倭武命　美屋受姫命

建立之年月日不分明河內國泉國今和大鳥神社ゟ河內國山口朝臣老當國玖珂郡佐ノ閑今熊毛郡佐賀村之鄉司中村連眞養子ニ相成別而信仰厚く神領貳町餘反寄附有之今神所ゟ申地名數ケ所有之分皆當社神領之古跡之由申傳候

右山口老下向之節田口朝臣加夫良弘仁五年同船ニ而來着佐ノ閑村ニ住す即田口加夫良儀ハ此家之始祖ニ御座候

一、社領之事

田五畝廿四歩　米壹石

右是迄ハ御除被仰付來候事

一、寶物　古鏡貳面

管玉十二　色青白紫等也

太刀鉾　其外破損形不分明鐵類數々

銅金具　古甲冑之餝金具ニヤ　古瓶十貳　掘出候節破損今全備之物無之

右寛延貳年社再建の節社地開拓仕候處土中ゟ出候品先年繪圖ヲ以御屆申上候事

一兜壹頭少々損し　餝太刀　矢箙氏分不傳

右大內家ゟ御奉納筒志馬之函豐國殿御代參有之由舊記に相見ゆ候事

一楯弓矢　只今不傳天明年間迄形少々殘居候由

右平氏三位中將殿ゟ御奉納之品ゟ申傳候事

一、御勸請之節御船にて御下向之處始而着岸之所若宮と申御揚陸之所船付ゟ申于今地名に相殘申候　扨當村にて廣平之場所見立神殿建立之土地築造四方に堀を構其節大神事之器物社地上段に埋藏之由申傳候此山瓢形也恰も御陵之如し寛延度掘出候品ゟ封合仕候

其後此所地名森ノ下と相唱候事

一、元暦元年平氏之軍船西海行之節難風に而誠に三位中將之御乘船漂流之時祈願有之錠泊之所投崎と申楯弓矢當社へ奉納之節揚陸之所于、今中將坂と相唱來候儀は里人之申傳も同樣之儀に御座候事

一　大内家御尊信不淺神前拜殿御再建社領御寄附有之由舊記に相見申候

佐賀村白鳥大明神社領之事

一、十二〻但同村之内永代々々寄附候上は不可有相違候條社役勤行等無怠□□□其節者也仍一行如件

文明二年庚寅二月朔日

御判

式部太夫

左馬助

一、再建棟札に相傳候分永正二年辛丑三月兵部太夫御良代天正十九年辛卯四月佐渡太夫元祿四年辛未三月志摩據永續代寛延元辰九月古今不双之大風雨神殿拜殿及大破可惜之甚は社殿に相納居候書類汚損產子申も非常之困窮にて再建延引同二年巳十一月上棟仕候其節六月十一日土地開立之時土中〻數品掘出候得ども大半汚損且又土中に埋杯仕殘り□に傳來之品は前寶物部に申出候通に御座候事

一、御神幸之儀は弘安五年午九月九日往昔御勸請之節御着岸之船付村迄始而御神幸其後天文廿二年丑九月九日再興濱田村江御神幸巳來只今迄年々其□□執行來候事

一、當村產神は元來美津宮八幡宮に御座候處中村家由緒有之白鳥宮に付信仰不殘誠に富強旁衆人も自然〻尊信厚く先祖左衞門清宗代〻白鳥宮日々盛に相成美津宮は日々衰絡に白鳥大明神を惣產神と奉尊敬り候樣相成申候

中村と申家筋之儀は追々俗姓河内元河内國より出候由其上弘と號其後河内山と相改追々分家出來候由宗家は俗に成森と唱來候其故は豐後同國より養子に來候豐後守貞盛之男左馬助成盛と申代餘程盛榮にて「なりもり」と仰事終に家名之如く申傳候由然る處元祿之頃貧窮相成脫走豐後國森と申所へ落着今以子孫連綿彼國に住居候右脫走之節中村家系は不及申白鳥宮由緒書等持出申候由分家四郎五郎盛丘之家をも俗に森岡と家名之如く相唱來候當時河内山五郎先祖に御座候處彼方にも右之通傳來御座候事

一、賀茂大明神　（略）

一、佐合鳩八幡宮　（略）

一、馬鳩八幡宮　（略）

一、神花大明神　（略）

一、平家大明神　（略）

一、家譜略覺　（略）

右私抱神社傳來□又家系舊記寫如此に御座候

以上

明治三庚午九月

四社神社

田村庸之介

○第八圖版

△獸帶四神四獸鏡　直徑七寸四分
　　重量三百七十八匁

發見地　周防國都濃郡下松町字宮ノ洲埴常社々地

發見年月　享和二年八月廿一日

所有者　熊毛郡岩田村國光駒三郎氏

此の古鏡は內區に四乳ありその間神像と怪獸を現はせるものにしてこれ等を發見せし古墳はその墳形を知られざれども此の地に大墳ありしものゝ如く漢式鏡四面を出したるものにして此の地は享和二年下松町磯部家祖先孝吉氏が宮ノ洲を開作するに當り此の附近より發掘し現今の地に納めしを明治初年再び發掘せられたるものにして決して始めより今の地に埋藏されしものにあらざるべし（第拾壹圖版參照）

○第九圖版

△神獸鏡　直徑七寸八分
　　重量三百七拾九匁

發見地　周防國都濃郡下松町字宮ノ洲埴常社々地

發見年月　享和二年八月廿一日

所有者　國光駒三郎氏

此の古鏡は第八圖版と共に發掘せしものにしてその構圖は支那晉の泰始鏡に近似し魏晉間の作と見るべきものなり。鏡背は半圓方形帶中に神獸を現はせり。

○第拾圖版

△王氏作盤龍鏡　直徑八寸三分
　　重量五百二十七匁

發見地　周防國都濃郡下松町字宮ノ洲埴常社々地

發見年月　享和二年八月廿一日

所有者　國光駒三郎氏

此の古鏡は第八、第九、圖版と共に發掘せられしものにして梅原末治氏の考察さるゝ所によれば王氏作鏡を以て王莽時代に推定する學者なきを保し難きも支那鏡鑑沿革の體系上より見て魏晋間の作と見るべきものなりと。鏡背に帶銘あり曰く

王氏作鏡四夷服。多賀國家人民息。胡虜殄滅。天下復。風雨時節五穀孰。長保二親天力。

○第拾壹圖版

△內行花紋鏡　直徑三寸八分
　　重量二十四分

發見地　周防國都濃郡字宮ノ洲埴常社々地

發見年月　享和二年八月廿一日

所有者　國光駒三郎

此の古鏡は第八、第九、第拾圖版のものと共に發掘せるものにして紐は圈を繞らし內行八弧紋によつて內區を形成するものなり。

宮ノ洲は周防天之橋立と稱し有名なる勝地にして琳聖太子の百濟國より携へ來りし妙見菩薩を一時此の地に移せしこと氷上の興隆寺緣起に見えたり。此等古鏡發見につき當時の覺書ありこゝに記して參考となさんとす。

（德山毛利家文書）

宮洲開發地石室覺　　磯部右衞門

一、享和元年辛酉三月十八日宮洲御山之內畠地開發仕度之段幸吉より御願申上候
一、同二年壬戌二月廿日去春御願申上候宮洲御山之內畠地開發之儀追々申出之趣に付願

之通被附候旨御沙汰被附候

一、同八月廿一日畠地追々關立候處凸之土地御座候故地平し仕掛候處石垣掘出し申候其内に鏡刀類御座候に付其段幸吉より御屆申上候

一、同廿四日左之通御沙汰御座候此間被屆出候右墓體之場所追而御差圖可有之候條其場所江差支不申樣氣を付可被申候爲此申達候以上

八月廿四日　　山部八尾助

宮洲屋幸吉殿

右之通御沙汰御座候に付番之者共置無緩せ氣を付申候

一、同廿七日先達而御屆申上候右墓體之場所御見分かたぐ御徒目付御下代役被指出候

一、同日左之通御沙汰御座候

下松町貳軒屋新助と申者鏡拾ひ候分御自分江相渡候樣御沙汰相成候間彼之者より引渡候はゝ先達之屆出鏡三枚同樣取始末可有之候爲此申達候以上

八月廿七日　　井上彥平

宮洲屋幸吉殿

急御用

一、同廿九日鏡壹枚貳軒屋之新助と申者持參仕候に付先達而御屆上候鏡三枚同樣被始末仕候

一、同晦日左之通幸吉より御願申上候

御願申上候覺

此間御屆申上候通宮洲御山開發地之内より石垣掘出申候處貴人之御廟所に而茂可有御座哉と奉存候間近邊之社家に相賴一應祭事仕追而は小社建大廻り江茂境立之印に玉垣相調以來は年中一度宛輕き祭事仕度奉存候

御免被仰附遣候樣奉願上候此段宜敷御執成被仰上可被下候奉願上候以上

壬戌八月晦日　　宮洲屋幸吉

山邊八尾助殿

一、同九月四日左通御沙汰被仰付候

宮洲屋幸吉

願面一應之祭事勝手次第取計可申候掘出之候石室中之諸品鏡刀類初追而御差圖有之迄遣失無之樣關發主宮洲屋ゟ締取計之儀達相成居候處此度祭事修行候付而哉鏡刀類は箱入にして石室中に差置締仕歟又は祭事相賴候社人之宅に當分相預置候歟之樣取計可申候尤骨類と相見え候物は何分石室中差置可申候而願面追而小社建調以下之儀此後御沙汰可相成候事

附願面小祠玉垣建調祭事取計等に心得相しらへ候而青出し可申候此度申出之祭事之儀は御領内社人江相賴可然尤名前可申出候事

壬戌九月四日

一、同七日黑神上總申請一應之祭事仕候今日埴常社（ハニトセシヤ）と神號附き申候

一、同十五日左之通幸吉ゟ覺書指出申候

覺

一、小　祠

但石に而相調西向に仕度奉存候臺石6惣高六尺二寸五分前壹尺五寸入壹尺五寸右小祠石室之前江建調仕石室を締仕り其儘指置申度奉存候

一、玉　垣

但竹に而相調中度奉存候高五尺横五間入六間

一、年中壹度宛祭事之儀を御領内社家壹人相頼八月廿三日に而茂祭事相調申度奉存候右之通仕度奉存候間宜様被仰上可被下候奉頼上候以上

九月十五日　　宮洲屋幸吉

山邊八尾助様

一、同廿六日黒神上總申請鏡刀類納處之儀於石室前御閣に而入申候處石櫃江入石室中に可指置申御閣に而御座候

一、同晦日先達而御頼申上候小祠建調之儀は暫延引被仰付候玉垣之儀は勝手次第相調可申候様御沙汰御座候

一、同十一月二日黒神上總申請鏡刀類石櫃入石室中に奉一同相納候

一、同十二月廿七日左之通御沙汰被仰附候

覺

右宮洲山之内身柄依願當秋地面開發中掘出候石室幷其中に有之候鏡諸器見分吟味相

東豐井村

宮洲屋幸吉

候處器物類尋常ならず惣而其様子全高貴之墳墓に相納故之如く土地封修いたし一應之祭事取行此上右之場所江小祠建立後來神祭仕度趣尚又伺出候に付建立被仰付御思召を以爲建立料白銀十枚御寄附被成候相應之建方可仕尚神祠地面御除幷爲祭事料開發地之内少々石除御附被成地面持主永々引請遂其支配祭祀方相憐申間敷候尤右建立方惣圍候而後年之修復等御構は不被仰付旁可相心得候事

附祭日之儀毎歳一度にして相極此度可伺出候事右地面石數御除之儀は此度之開發惣地面畝反盛相成候上可及其沙汰候事

戌十二月廿七日

幸　吉　殿

右無紛候以上

福根孝右衛門

同　日

原田儀右衛門

一、亨和三年癸亥正月廿三日左之通幸吉6御伺申上候

覺

一、神　祠

但木に而相調可申奉存候臺石6惣高さ壹丈貳尺八寸前三尺八寸入參尺壹寸前と左右江壹尺四寸之椽を付別圖面之通相調可申奉存候

一、玉　垣

但木に而相調赤色付に仕高さ五尺横五間半入七間半可仕候奉存候

一、祭日之儀毎年八月廿三日相極

御領内社家兩人江相頼可申奉存候
右之通御伺申上候間宜様御指圖被仰付可被遣候此段宣被仰上可被下候奉頼上候以上
癸亥正月廿三日　福根孝右衛門　様　宮洲屋幸吉

一、同閏正月七日左之通御沙汰被仰付候神祠建方伺出通取計可申尤時節柄之儀に付組も
の等は圖通ゟ少々略之方可然將又玉垣五間半七間半之調方茂玉垣之儀は指止石右之處
江相應之樹木等後年地面之蔭に格別不相成様之分遂吟味植方仕其圍相しつらい可然候
尚又祭日之儀は毎年八月十三日相極御領内社家兩人江執行爲仕度如願被差免候事
右之通被仰出候條此段可被得其意爲此申達候以上
癸亥閏正月七日　福根孝右衛門　宮洲屋幸吉殿

右無紛候以上
同日

一、同閏正月廿七日
殿様爲御遠乘此邊被爲遊御出開發地神祠邊江茂被爲遊御行歩候

一、同十一日時祠建調仕候に付來る廿三日黒神上總申請上遷宮仕度之段幸吉ゟ御屆申上
候處同廿日御開濟被仰付候

一、同廿三日黒神上總申請上遷宮仕候
右之通御座候以上
乙丑八月　磯部際右衛門

殿候様御沙汰相成候間彼之者ゟ引渡候はゞ先達之屆出鏡三枚同様取始末可有之候爲此申達候以上
八月廿七日　井上彦平
宮洲屋幸吉殿
急御用

○第拾貳圖版

△劉氏作畫象鏡　直徑五寸八分

發見地　周防國都濃郡富田町竹嶋御家老屋敷

發見年月　明治二十一年二月十二日

所有者　都濃郡富田町藤井六郎氏

此の古鏡は鏡背に神人龍虎を表現せるものにして所謂漢代畫象石の手法と同一の故を以て畫象鏡と稱す。これ等遺物を發見せられし古墳はその墳形圓墳にして石槨は堅穴式のものなり。古鏡三面銅鏃二十六本斧頭、刀劍殘缺を發見せり。鏡背に帶銘あり

劉氏作竟、明如日月、佳且好上有、東王

の十五字は明らかに讀まる嶋田貞彥氏の說によれば其以下は磨滅甚だしく判讀に困難すると共に其の個所に文句を押入し上句の「マクハリ」を以てすれば二字の區間を殘せるのみ若し斯くとすれば父西の二字を以て切棄てたるものとさる。鏡中の二人物を以て東王父西王母に擬するものなるべくかゝる神仙談の流行は漢末、三國、六朝、を通じて盛行したるものにて該式鏡はほゞ年代の詔定さるゝものなり。また五朱錢型を紋樣に認めらるゝよりしても相對年代を推定せしむる傍證とさるゝべし。

○第拾參圖版

△天王日月四神四獸鏡　直徑七寸二分五厘

發見地　周防國都濃郡富田町竹嶋御家老屋敷

發見年月　明治二十一年二月十二日

所有者　藤井六郎氏

此の古鏡は第拾貳圖版のものに伴出せしものにて帶銘に當る線上に方形の區劃を設け各區毎に「天王日月」の四字を外方より讀むべく現はされたるものなり。而して其區間には走れる龍の如きものを鑄出し其表現の平法は此種の鏡鑑に見る半肉彫の線條模法にして同塵の出土遺品中良好のものなりと云ふ。

○第拾四圖版

△神獸鏡　直徑約七寸

發見地　周防國都濃郡富田町竹嶋御家老屋敷

發見年月　明治二十一年二月十二日

所有者　藤井六郎

此の古鏡は第拾貳、第拾參、圖版のものに伴出せしものにして腐蝕甚だしく且つ破碎せるものなり。鏡背紋樣を明らかにせざれども神獸鏡と推察せり。

故近藤清石氏の此等遺物に對する感想を記るせるもの今藤井氏邸に保存さる、當時の考古學の智識を見ると共に發見記錄を補ふ興味ある一資料としてこゝに記す。

都濃郡福川村に藤井考太郎と云ふ人があり富人にてこのあたりの島四島を吾が物ともてり。其の中の竹島と云ふ島の頂を去にし月、畑に開かんと多くの人つとへて九尺ばかりすきとらせたるにめぐりを石もてたゝみて大石あまた入れたるを掘り出せり心なき雇はれ人共なれば昔の貴人の奥津城なりといかで知るべき掘りつくして石とり棄つるに底に剣三口銅の鏃二十餘り六枚と鏡三ひらありけり、御掟のまに〳〵德山警察分署に申出け

れば分署長神本國臣ぬし巡査佐々木某三好某にもたらして廳にさし出さるゝに己れに消息して何れの代の物なるか考もあるは聞えてよとありて其の品とも見せられたり鏃は塗金せしもの劍はさび朽ちて段々に折れたるが木の理のつけるがあり布の目のつけるがあり朱のつけるがあり。鏡は一枚は小さくくだけ裏紋わきまへ難しふたひらは全くて其一枚は所謂天王日月鑑なり。一枚は男女及び馬車龍など型鑄つけて質明如日月佳且好上有何王何母□□劉氏作の十九字あり何は何の字なるか上なるは車よみとりがたしまた上下左右に錢の形を鑄つけたりその二は五朱の錢文かと覺ゆ世に珍らしき鏡なりとほむるに藤井に歌よみてとらせ給へ神平ぬしよりも、しかことづけてありき、とて紙とうてたるに、かたへにある人の「價にせばいかばかりのものならむ」と云ふに「付ね布山しろ道を人つまの馬より行におのつまの、かちよりゆけば、見ることにねのみしなかゆそく思布に心しいたし、たらちねの母が形見とわかもたるまそみ鏡にあつき領布、おひに、なめ持て、馬かへわかせ」と云ふ古歌のふと思ひ出られければかくぞよみたりしと云へり。

鏡にて馬ほしからばかひ平つしつるき鏃をおひにせすとも

明治二十有一年二月　近藤清石

友人入江石泉來たりて何くれ語らふに此の鏡のことに及びて云へらくやとはれ人の頭らたつ者いかゞ思ひけん文字の形うつしをけりとて見せたるが上の何は東下の何は西の字の如し何とも讀みとりがたく、なけるはまみれたる泥土洗布とてすりやぶれるものなり

○第拾五圖版

△素縁龍虎鏡　直徑二寸九分　重量三十八匁四分

發見地　長門國阿武郡三見村

發見年月　明治年間

所有者　

編者　

此の古鏡は内區四個の圓座乳の間に二龍二虎を畫けるものにして比較的簡單なるものなり此の形式にて獸文縁あるものは他にその例あり。また大泉五十の錢形二個を圖せるものありと云ふ是等鏡の年代を推定する資となすべし備中國小田郡陶山村大字押撫並に攝津國三島郡福井村海北塚より發見せられしものは此の種のものたり。その年代は漢代及び其後引續き永く行はれしものと言ふ。

○第拾六圖版

△內行花紋鏡　直徑二寸九分五厘
　　重量二十三匁五分

發見地　長門國厚狹郡吉田村吉田神社ノ上

發見年月　昭和二年六月五日

所有者　厚狹郡吉田村吉田神社

此の古鏡の鏡背紋樣は內行六孤紋によつて內區を形成し紐は圈を繞らせるものにして比較的單純なるものなり發見當時に實見せられたる山根榮三氏の談によれば此の古鏡發見の古墳は全長六尺五寸幅一尺六寸位の石槨を有するものにて北を頭部として頭の右橫側に自然石を置きその上に此の鏡を置きありしと云ふ。

○第拾七圖版

△獸首鏡　直徑三寸

發見地　周防國佐波郡西浦村男山

發見年月　安政元年五月十三日

所有者　東京帝室博物館

此の古鏡は一種の獸首を鑄出したるものにして內區に六個の圓座乳あり。その間一獸首を現せり次に一圈を隔て櫛齒紋帶あり緣は素紋なり。

安政元年五月十三日始めて發見せられまたもとの如く古墳に納めしを明治三十三年十一月廿七日再び發掘されしものにしてその發見せられし古墳は圓墳にて竪穴式と見らるゝものなり。伴出物には土器玉等を發見せりと云ふ。

○第拾八圖版

△五　神五乳鏡　　直徑四寸二分

發見地　周防國佐波郡西浦村女山

發見年代　明治年間

所有者　佐波郡中之關村嚴島神社

此の古鏡は紋樣明らかならず。本邦製品と見るべきものにして內區に五乳あり。その間に神像を配せり。銅鏃を伴出せしものなり。

男山は吳山（黑山）と稱せられ此の附近の女山に對して男山と言ふ。男山には古墳石槨の殘れるもの拾數個あり。前記古鏡を發見せしは山上にある竪穴式のものなれども、他はいづれも複室式の橫穴式のものなり。その一例を示せば入口を東南に向はしめ玄室與壁幅五尺高十尺長八尺第二室との界長一尺四寸高三尺四寸幅四尺二寸第二室高二尺六寸長五尺二寸幅五尺第三室との界長一尺四寸高一尺八寸幅四尺第三室高二尺六寸長六尺幅三尺あり。また女山にも古墳石槨の殘れるもの八個ありその大さ形狀はほゞ男山に同じ。

○第拾九圖版

△四　獸鏡　　直徑四寸二分

發見地　周防國吉敷郡山口町大字下宇野令字赤妻小字粭山

發見年月　明治三十年四月四日

所有者　東京帝室博物館

此の古鏡はその紋樣の獸形比較的原型に近く、內區に四個の乳を置き其の間兩種の怪獸（龍虎紋）を交互に配せるものなり。その發見せられし古墳は墳形明らかならざれども當時發掘に立會はれし故近藤清石翁はその調査書に「一座の土饅頭式云々」と記されまた「土の色五層にかはり云々」と記さるゝより見て編者は圓墳にはあらざりしかと想像せり。

始め明治三十年三月廿三日に一個の石窟を發掘し、同年四月四日また一個を發見したとあり。この二個はいづれも組合式の石棺らしく、三月廿三日に發見せられたるものは兜鐵襟刀鏡、巴形銅器等なりし事は當時の實見者にして土地所有者たる岩本榮之進氏の談及び故近藤清石翁の調査書によつて明らかなり。この組合式石棺と結合して作られしものにて四月四日に發見されし組合式の石棺は、棺の底部に小石を敷きあり。內部より

骨、四獸鏡（第拾九圖版）並に貝殼を以て作りたる裝飾品等を發見せり。四月四日發掘の組合式石棺に添へて作られたるものは三月廿三日發見の石室にて此の石室よりは前記の遺物主として武器を入れあり。四月四日發見の組合式石棺には東方を頭とせる人骨あり て古鏡を添へ、その人骨の頭部の上方に石室を作りて武器を入れしものは三月廿三日發掘の石室なり。かくの如く副葬品と死者を別々の石棺に納めて埋むる事ありしは之れによつて明らかに知らる。四月四日發見の組合式石棺は現に山口縣立敎育博物館に陳列せらる。また三月二十三日發見の組合式石棺の蓋石も共に同館に出陳せられあり。その大さにつき三月廿三日發見の分は破壞せられて不明なれども蓋石は長五尺三寸幅廣き所にて三尺三寸二分ばかりと、故近藤翁の調査書に有り。四月四日の發掘にして現に山口博物館に在る組合式石棺は蓋石長六尺幅三尺四寸云々とあり。編者の實測によれば石棺内寸上幅一尺九寸下幅一尺八寸全長五尺五寸石の厚さ四寸側面高さ一尺七寸五分外部の全長六尺にしてその大さより見るも三月廿三日發掘のものと四月四日發掘のものとはあまり異ならざるべく、只前者は石材の小さきものを使用しその間隙を粘土にてぬりしものと想像さる。

○第貳拾圖版

△變形圖樣鏡　直徑三寸五分

發見地　周防國吉敷郡山口町大字下宇野令字赤妻小字粭山

發見年月　明治四十一年八月二十五日

所有者　東京帝室博物館

此の古鏡は鏡背の紋樣甚だしく變化し内區四乳の間に配せる文樣一種の綟形狀を呈せり石棺内の足部にて發見せられしものなり。（第貳拾貳圖版參照）

○第貳拾壹圖版

△位至三公鏡　直徑二寸八分五厘

發見地　周防國吉敷郡山口町大字下字野令字赤妻小字粕山

發見年月　明治四十一年八月二十五日

所有者　東京帝室博物館

此の古鏡は鈕をへだてゝ「位至三公」の文字あり。文字の兩側に獸形を現はしたるものにして此種のものは支那三國若しくは六朝初期のものなり。（第貳拾圖版）のものに伴出せしものにして石棺內部中央胸のあたりより發見せらる。（第貳拾貳圖版參照）

○第貳拾貳圖版

△內行花紋鏡　直徑二寸四分

發見地　周防國吉敷郡山口町大字下字野令字赤妻小字粕山

發見年月　明治四十一年八月二十五日

所有者　山口縣立大典記念教育博物館

此の古鏡は鈕に圈を繞らし內行六弧紋によつて內區を形成す。第五、第拾壹、第拾六圖版と同形式のものにして第貳拾、第貳拾壹圖版と共に石棺內より發見せられしものなり近藤翁の調査書によつて記せば、「明治四十一年八月二十五日にまた〳〵舟形石棺を發掘さる。前記三十年に發掘せられし組合式石棺と相去ること九尺」とあり。これ等の石棺はいづれも石槨を有せずして東を頭部として埋葬せられしものなり、この石棺は編者の調査によれば底部全長七尺二寸中央高一尺頭部高九寸五分幅二尺三寸足部高八寸幅一尺三寸五分椽厚さ二寸內の深さ八寸左右に二個宛と足部に一個いづれも外方に向つて突起ありゝ少しの差異はあれども此の突起は長約五寸幅四寸五分。蓋部全長五尺八寸九分五厘頭部高八寸幅二尺三寸足部高一尺〇二分幅一尺三寸五分にして內部遺物の位置は發掘

當時の寫眞によれば頭部には拳大の自然石四個を置きあり。近藤翁は之れを「枕の石」と稱せらるゝも普通古墳より發見さるゝ考古學上命名されし枕石の如く人工を加へざるものなり。その目的は近藤翁の說の如く枕とせしものかも知れず。頭部附近には櫛、曲玉などの玉類を發見し胸のあたりに內行花紋鏡（第貳拾壹圖版）を發見せり。中央左側手のあたりより玉類を發見し下方足の先きにて變形圖樣鏡（第貳拾圖版）を發見せり。

最後に此の內行花紋鏡につきその出所を記せんに元その當時古墳發掘に立會はれし近藤清石、平野雄也、兩氏の蒐集品中にありしものにて今は兩氏ともに故人なれば詳細を聞くに由なけれども、山口縣立博物館に一面とそれと同樣同寸（徑二寸四分）のもの東京帝室博物館に一面ありとの事なり。さすれば東京に在るものは赤妻古墳より出でたるは確かなるべく、山口博物館の物も近藤氏等の蒐集品なれば確かに此の古墳より出でしものなるべし。二面の內行花紋鏡を同古墳より發見せしにはあらざるか記錄とは異なれども遺物の殘り居るより見てさにあらざるかと思はる。

本墳の記錄にては埴輪破片の發見記事あれども土偶の發見されし記事なし。されど現に近藤氏の蒐集品中には二個の土偶の殘り居るあり。此の古鏡も斯くの如く記入洩れのものかとも思はる。

或は言ふ「山口博物館に在るものは山口町朝倉山より發見せしものにはあらざるか」と後日の調査を待ちて決定すべし。

○第貳拾參圖版

△三神三獸鏡　直徑七寸
　　重量貳百參拾匁

發見地　長門國厚狹郡厚狹町大字郡字西下津小字長光寺山

發見年月　明治十四年舊三月十九日

所有者　厚狹郡厚狹町大字西下津熊谷彌之助氏

此の古鏡は內區に六個の乳あり。その間に三神三獸を現はせるものにして三面同形式のものを出したる外に、內行花紋鏡一面、石製鍬形石（碧玉岩製）湖州六花鏡（直徑四寸二分）一面を發見せり。此の湖州鏡には銘文「湖州眞石家念二叔照子」とありこの種の古鏡は支那宋時代に盛んに作られしものにて古墳築造年代のものとは思はれず。我が國に於ても多くは經塚より出土するものにして周防國都濃郡黑神鵜宇船隱經塚より明治二十年九月平安朝時代の和鏡松喰鶴鏡一、草花蝶鳥鏡三、流水魚鳥鏡一、瑞花鳥鏡一、草花鳥鏡一、白磁壺一、と共に湖州六花鏡一面を發見せし事あり。

されば恐らく後世の混入と見るべきものなるべし。この遺跡は今はその跡を留めざれども發掘當時に實見せられし熊谷彌之助氏の談によれば石槨は蓋石幅三尺位のもの十枚あ

り。槨内には三尺位土砂入りありて埋まり居たりと言ふ。その土砂を除きて槨の總高六尺位なりしとの事にてこの土砂中より鏡などの遺物を發見せしものなり。本墳は頂徑十間高十間位の圓墳の如く側壁割石を使用し石質は花崗岩なり。倍塚本墳を去る五、六十間の所にあり注意すべきは本墳は二個の石槨を並列せしものゝ如くその間十二尺あり。

○第貳拾四圖版

△三神三獸鏡　直徑七寸
　　重量二百二十匁

發見地　長門國厚狹郡厚狹町大字郡字西下津小字長光寺山

發見年月　明治十四年舊三月十九日

所有者　熊谷彌之助氏

此の古鏡は第貳拾參圖版に伴出せしものにしてその紋樣は廣く我國各地の古墳より出土す。其の多く紋樣の異形化と手法とにより本邦製品と推定せり。

圖版

○第貳拾五圖版

△三神三獸鏡　直徑七寸
　　重量二百匁

發見地　長門國厚狹郡大字郡字西下津小字長光寺山

發見年月　明治十四年舊三月十九日

所有者　熊谷彌之助氏

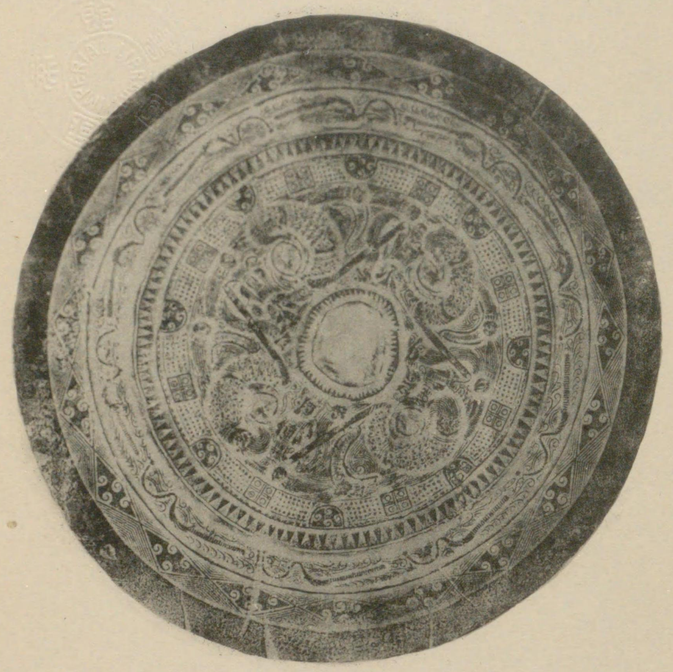
此の古鏡は第貳拾三、第貳拾四、圖版に伴出せしものにして本墳よりは此の外にまだ二三面の古鏡を發見せられし由なれども今は所在不明にして知るに由もなし。

第壹圖版

三鈕細紋鏡

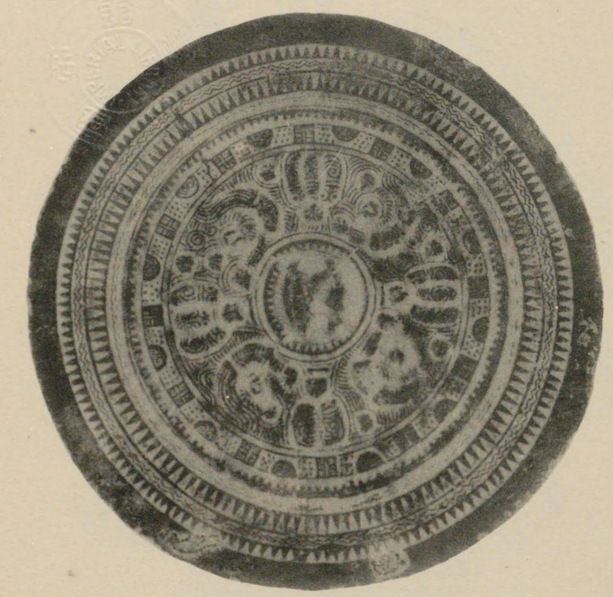
第二圖版

變形神獸鏡

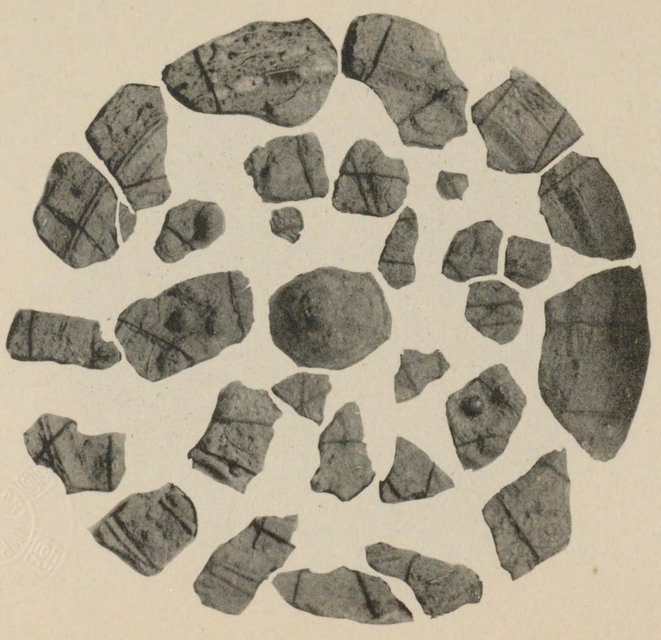


第三圖版

變形四神四獸鏡



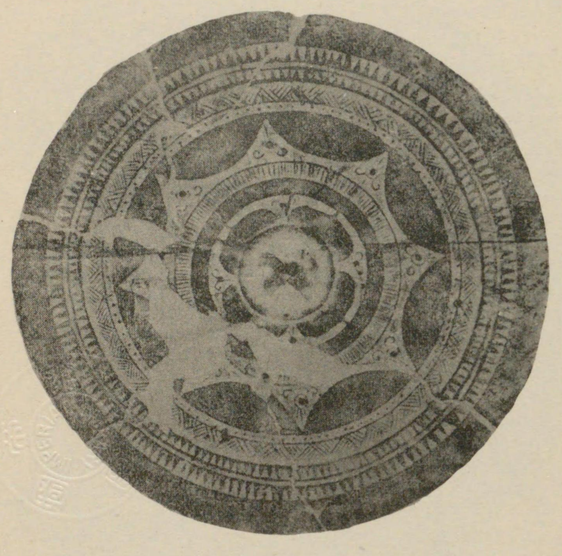
四神四獸鏡



第四圖版

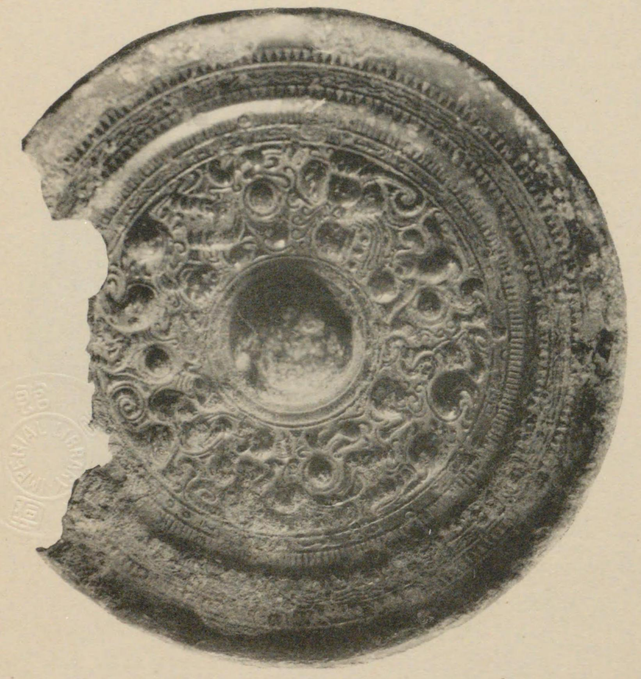
第五圖版

內行花紋鏡

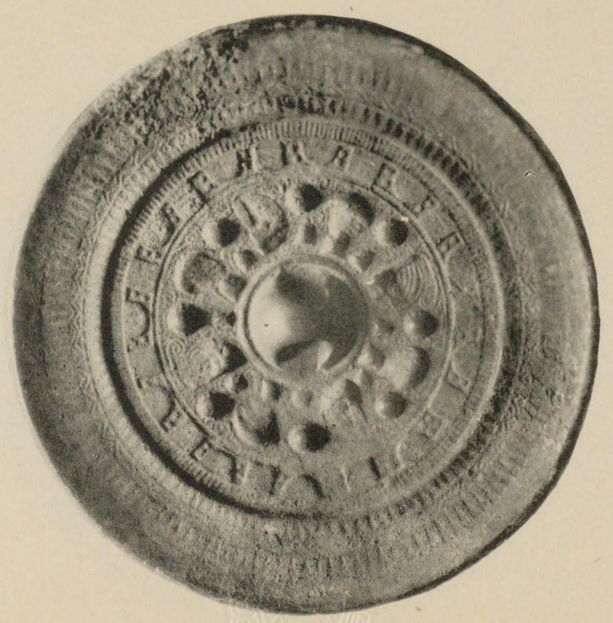


第六圖版

神獸鏡



四神四獸鏡



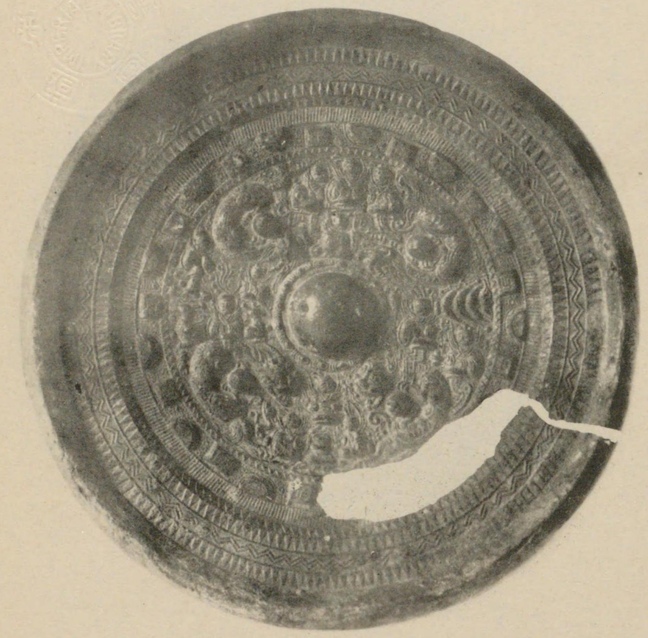
第七圖版

第八圖版

獸帶四神四獸鏡

第九圖版

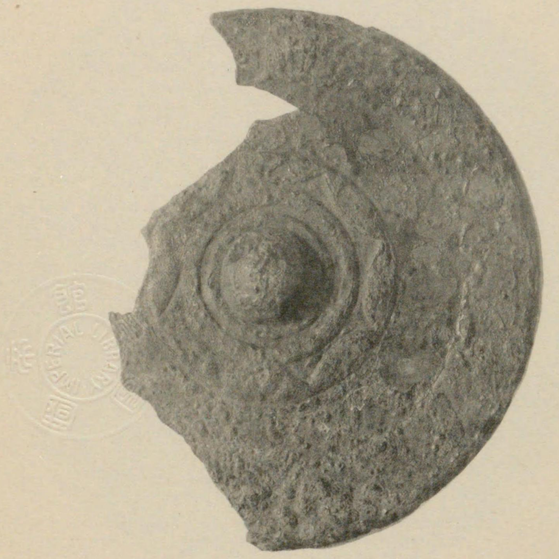
神獸鏡



王氏作盤龍鏡

第拾圖版

第拾壹圖版



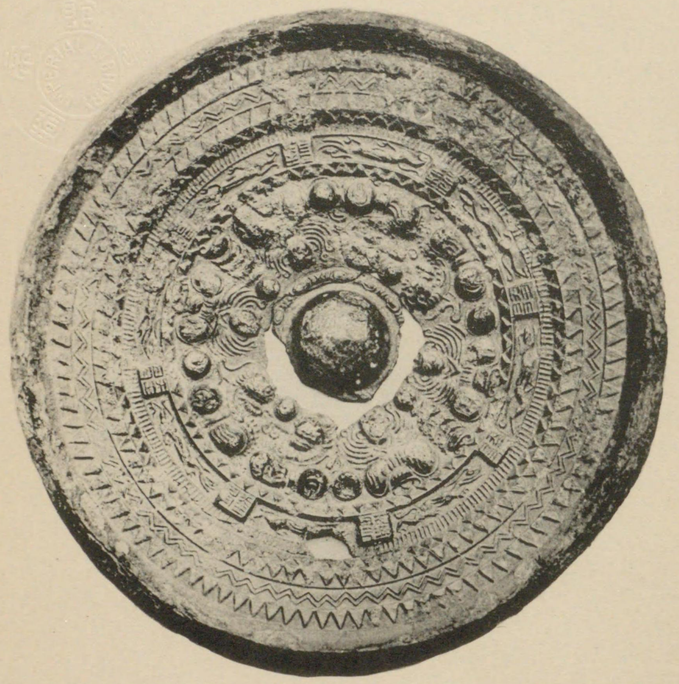
內行花紋鏡

第拾貳圖版

[illegible]氏作畫象鏡

第拾參圖版

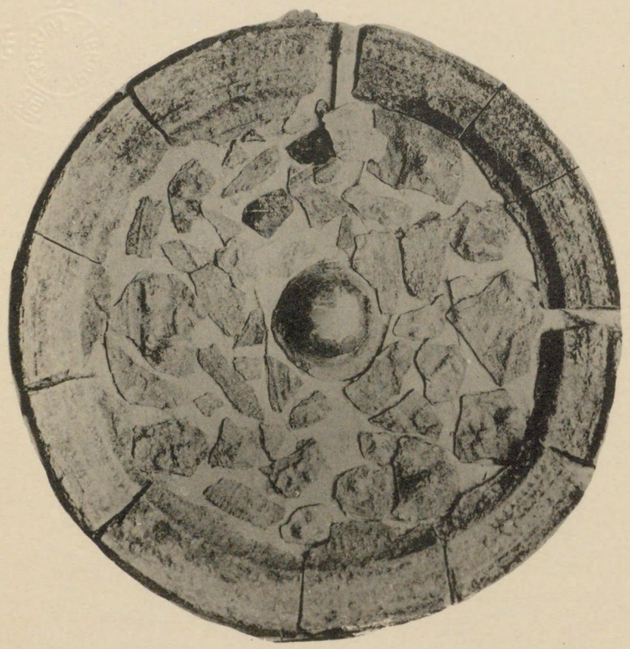
天王日月四神四獸鏡



570
80

第拾四圖版

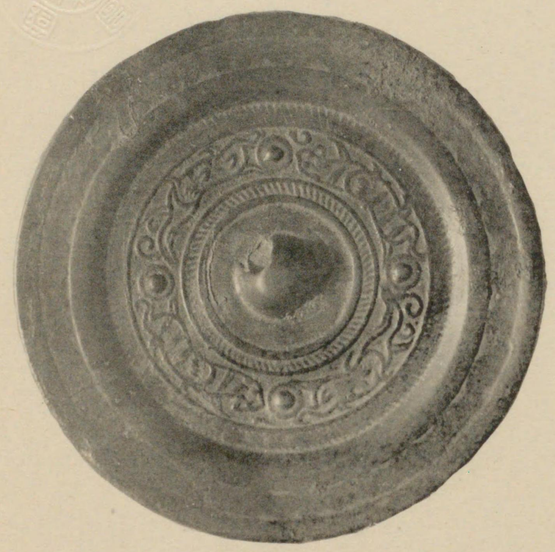
神獸鏡



570
80

第拾五圖版

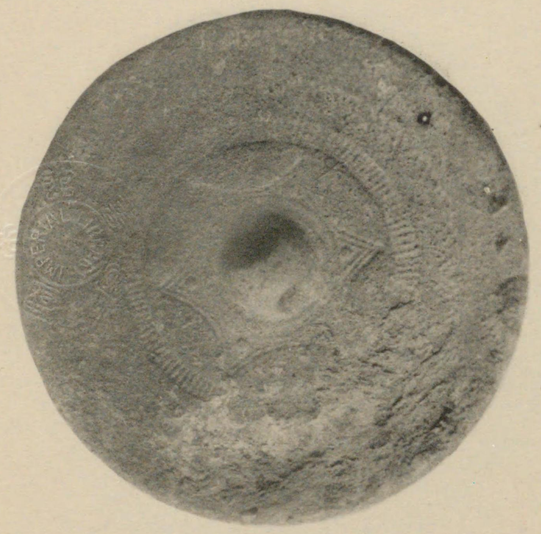
四乳龍虎鏡



570
80

第拾六圖版

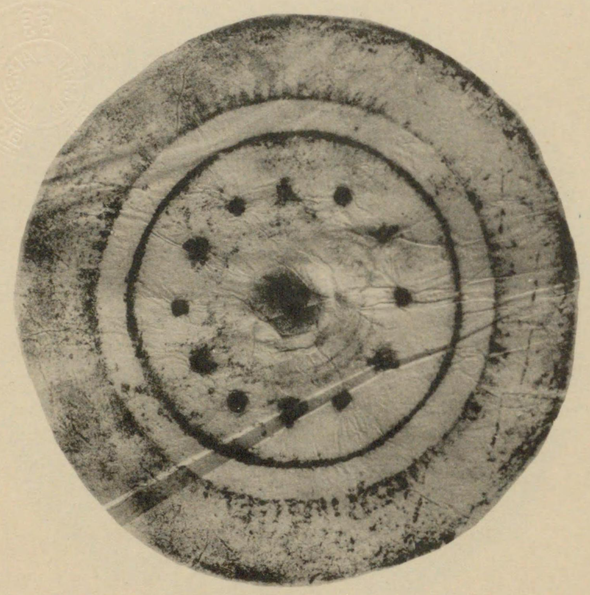
內行花紋鏡



576
80

第拾七圖版

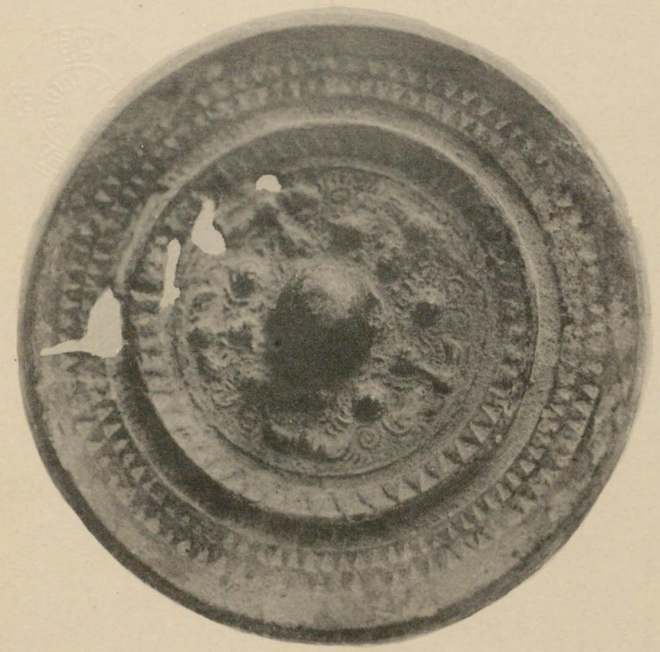
獸首鏡



576
80

第拾八圖版

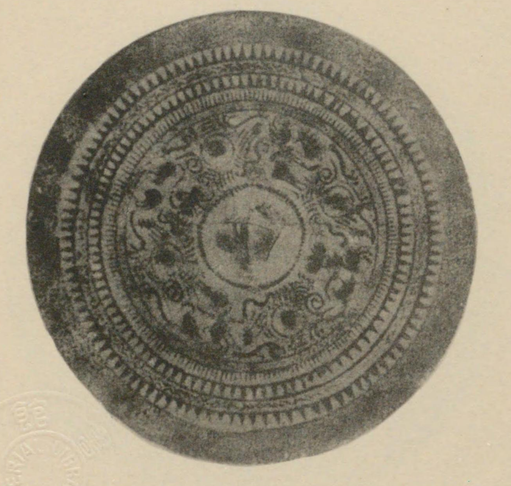
五神五乳鏡



570
80

第拾九圖版

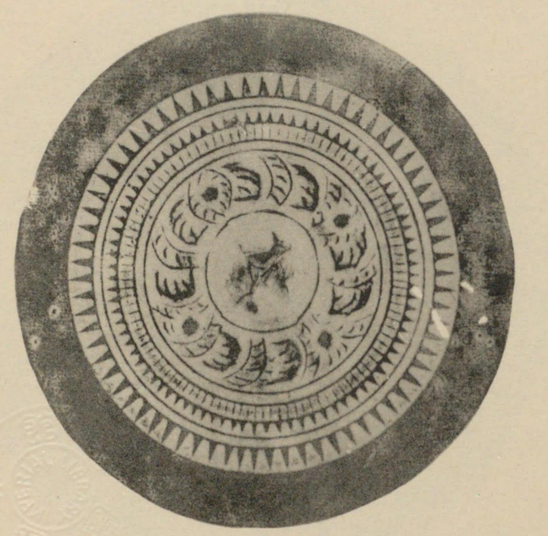
四獸鏡



570
80

第貳拾圖版

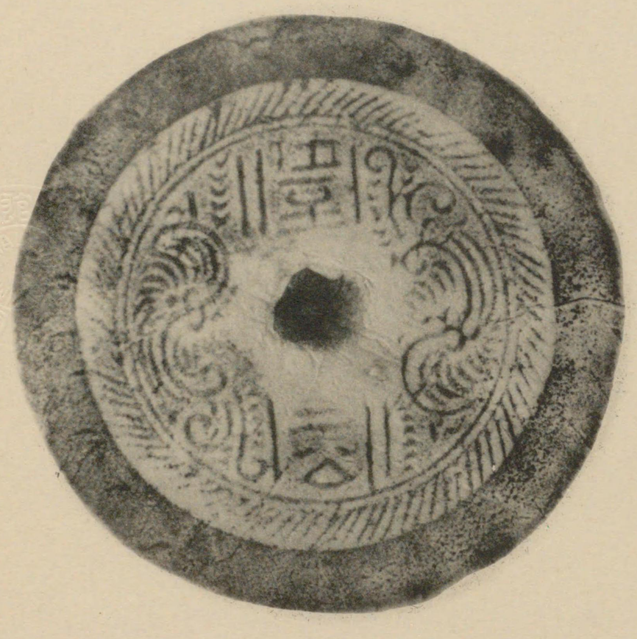
變形圖樣鏡



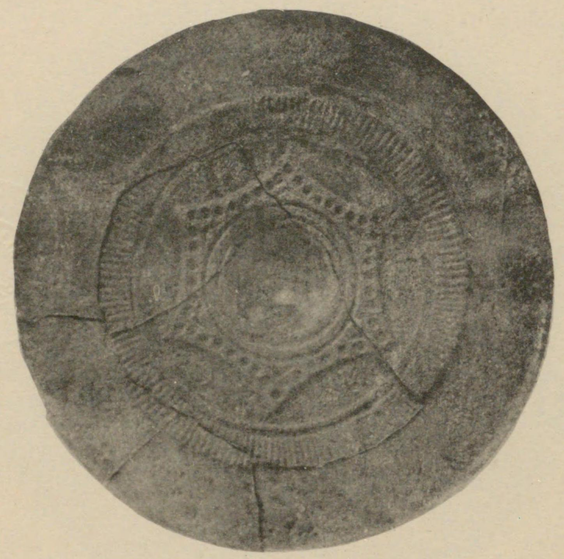
570
80

第貳拾壹圖版

位至三公鏡



570
80



內行花紋鏡

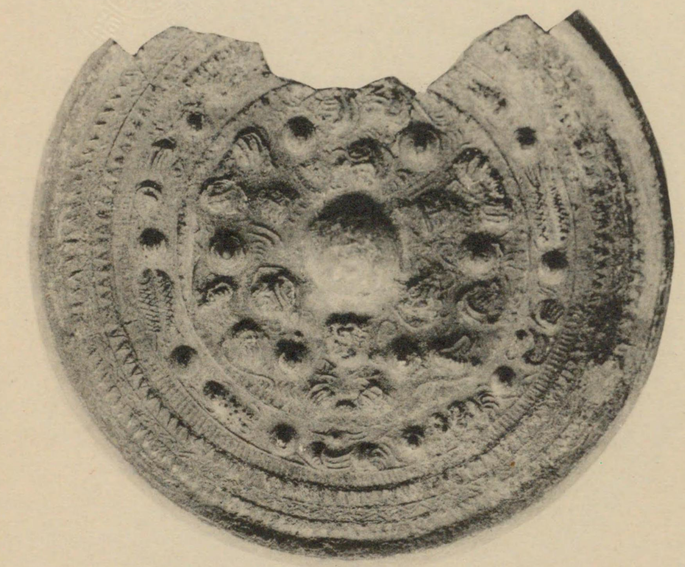
570
80

三神三獸鏡

570
80

第貳拾四圖版

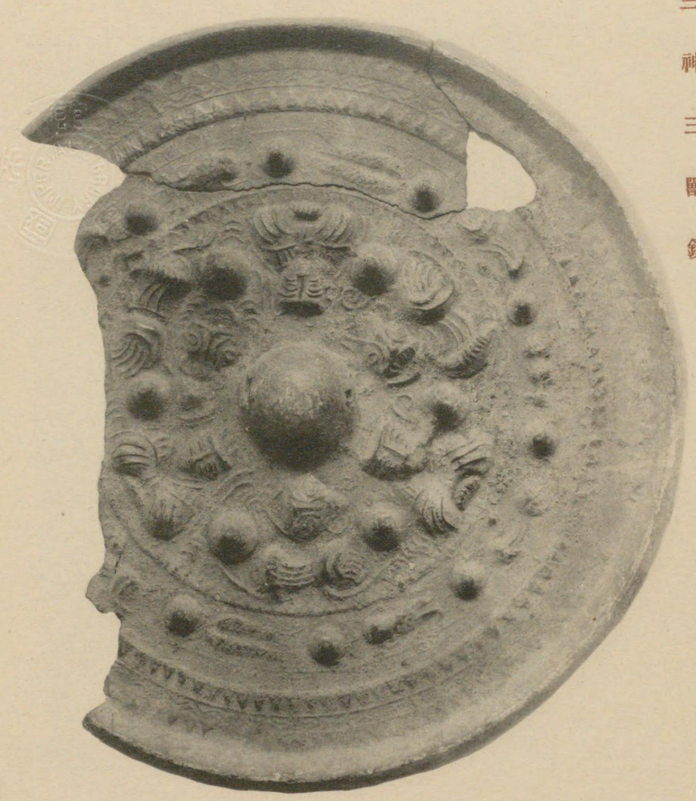
三神三獸鏡



570
80

第貳拾五圖版

三神三獸鏡



570
80

編者

570
80

本書の參考とせし書は左の如し。

古鏡の研究	富岡謙藏先生著
鑑鏡の研究	梅原末治先生著
山口縣風土誌	近藤清石先生著
赤妻古墳	近藤清石先生著
考古學雜誌	東京考古學會發行
古墳横穴發見地名表	東京帝國大學發行
古墳と上代文化	高橋健自先生著
鏡と劍と玉	高橋健自先生著
大日本地名辭書	吉田東伍先生著
朝鮮總督府古蹟調査書	總督府發行
周防遺蹟遺物發見地名表	山口高等學校歷史教室發行
防長考古學雜誌	防長考古學會發行
防長考古資料寫眞集	弘津史文著
周防國熊毛郡上代遺物遺跡發見地調査報告書	弘津史文著
山高鄉土史研究會考古學研究報告書	山口高等學校歷史教室發行

576
80

昭和三年八月十日印刷
昭和三年八月十五日發行

（非賣品）

編輯者　山口縣山口町野田拾五番地　弘津史文

發行者　山口高等學校歷史教室　山高鄉土史研究會

印刷人　山口縣山口町道場門前第百十番地ノ十　平佐國介

印刷所　同　大同印刷舍

正誤表

頁	行	誤	正
圖版說明	目次	第拾參圖版。天王日月四福四獸鏡	天王日月四神四獸鏡
六頁	十行	三鈕素紋鏡	三鈕細紋鏡
二十八頁	十一行	表現の平法	表現の手法
三十一頁	二行	素緣龍虎鏡	四乳龍虎鏡

570
80